

市民協働型の幼児教育推進体制づくりー伝統染織による実践資源を活用してー

事業代表者 教育学部・教授・佐々木和也

構 成 員 教育学部・准教授・良香織 高根沢町環境課・課長・阿久津幽樹

NPO 法人ふるさと未来 Sou・理事・野村恵子 陽だまり保育園・理事長・木村厚志

1. 事業の目的・意義

研究代表者は、これまでエコ・ハウスたかねざわとの連携で、伝統染織を取り入れた環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより環境啓発活動を支援してきた。この資産をベースに、2008年度より、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化する活動を、老人介護施設の農地を利用して展開してきた。事業を通して、町の不登校児童・生徒の居場所フリースペースひよこの家、地域の保育園と連携体制を築き、家庭内で伝承されてきた和綿文化を地域モデルとして、地域創造に関わることでできる市民の育成に寄与し、当初の目的を達成してきた。この事業で築いた体制をベースに、13～15年度の期間中で、地域再生の拠点として幼児教育機関と連携し、地域で子どもを見守り、育てるという伝統的なスタイルの価値再生を目指して、藍染活動を通して実践研究を行ってきた。成果として、研究代表者が指導してきたふるさと未来 Sou の自主活動グループ「里山文化の会」が、陽だまり保育園（私立）・にじいろ保育園（公立）と連携して、里山環境で藍を栽培し、藍染活動を展開しながら地域の任意団体である桑窪花づくりの会との連携体制づくりができた。

以上のような成果を元に、本事業では伝統染織がもつ文化的価値を幼児教育に生かしていく担い手づくりに焦点を移し、幼児期の環境と関わる力を育てる自然保育について検討する研究会を立ち上げる。そこでのメンバーが中心となり、15年度までに実践してきた藍染活動を通じた環境教育効果を検証しつつ、幼児教育に関わる保育士ならびに保護者・地域が必要とされる資質と役割について発信する。

2. 事業内容

(1) 研究会キックオフ【H28】

エコ・ハウスたかねざわを拠点に、陽だまり保育

園との連携で「伝統染織保育研究会(仮称)」のコアを保育士ならびに本事業連携者を中心に立ち上げる。里山・遊び・衣食住などをキーワードに専門家を招いて研修を進め、幼児期の自然保育を支える専門的知識と技能を修得しつつ、地域コミュニティ形成の視点から成果や情報を地域への発信を行っていく。

(2) 幼児教育における藍染活動の検証【H28-30】

幼児期は小学校以降の教科的な学びではなく、領域的な学びであり、複合的な観点から子どもの育ちを支援し、「三つ子の魂百まで」といわれるように、感性発達を促す保育が必要である。これらの観点から、藍染実践を研究会が中心となって行い、次に述べる評価方法の検討も含めて環境教育効果を検証する。最終的には、幼児期の環境に関わる力の育成に必要な支援のあり方を考究し、保育者・保護者・地域が備えるべき資質と役割について検討する。

(3) 質的評価手法に関する試案【H29-30】

イ) 発達評価指標の導入の検討

JSI-R(感覚発達チェックリスト)などの発達指標の導入を検討し、質的評価との関連を検証する。

ロ) 集中度の評価手法の検討

宇都宮大学感性情報科学研究会(UU-Kiss)と連携して、こどもの集中度(取り組みへの動機付け研究)を計測する方法を検討し、客観的な評価の指標として用いる。

3. 事業の進捗状況

初年度として、活動組織として「伝統染織保育研究会(仮称)」の立ち上げにおいては、連携先の保育園が中心となって、高根沢町内の保育園・幼稚園および児童館に呼びかけを行い参加を募った。また、同町のこども未来課からのバックアップも受けることができた。しかしながら、連携保育園以外からの参加者を得ることができなかった。この点については、次年度も継続的に情報発信しながら会員を募つ

ていきたい。この研究会のミッションとしては、日頃の保育を通して自然との関わり方といった自然保育に必要な課題を見つけ、それらをNPO法人といった地域との連携で研修機会を創造することである。

また、10年間の履歴をもつ連携保育園で行なっている藍染保育の実践と検証により、地域の資産と結びつけながら自然保育の可能性を探ることである。今年度は、教育学部総合人間形成課程の必修科目「プロジェクト研究」で立ち上がった「陽だまり里郷プロジェクト」との連携を図り、3回の研修会（伝統染色WS、植物観察、生物観察）を開催することができた。さらに、来年度から予定している藍染活動の質的評価手法の検討に先立ち、動機付け研究の視点を取り入れて、年長の藍染活動をビデオ分析によって検証を試みることができた。

以上より、当初の計画は遂行しており、それ以上の成果を得ていると判断できる。

4. 事業の成果

(1) 研究会の立ち上げと研修会の実施

イ) 研究会

保育士が日常的に多忙であることは指摘されている通りであり、それが原因の一つになり研修の機会を得ることが困難であることは、有識者会議でも次期幼稚園指導要領および保育指針において研修によるスキルアップを柱の一つに掲げている。このような状況から、今年度はメンバーを固定しないで、以下で述べる研修会に勤務シフトを考慮して参加者を連携保育園に選任してもらった。研修の内容等については、連携先のNPO法人と保育園理事長・園長がコアとなって調整することから始めた。

ロ) 第1回研修会「草木染を通した里山遊びワークショップ」(2016.9.24)

第1回は染色家の山崎和樹氏を講師に招いて、「ものづくり」の観点から里山に関わるというコンセプトで講話とワークショップを開催した。また、午前中には、同僚の出口明子研究室の支援を受けて、「里山スゴロク」を使って里山の生物多様性を理解する機会を設けることで、単なる染め物講座にならないようにした。なお、キックオフを兼ねるために公開

講座とし、一般からの参加者も多数あった。今後の活動においても可能な限り公開していきたい。



図1 里山スゴロクの説明をする出口先生

山崎氏の講演では、里山の代表的な色と伝統的に使われた染料の染色史および化学的な解説をいただいた。保育士研修としては多少難しい感があったが、参加者は熱心に話に聞き入っていた。



図2 山崎氏の講演会の様子

続いて、実践編としてマメガキを使った叩き染めと有機顔料づくり（タマネギ、エンジュ）を行なった。前者はタンニン（渋）のアルカリとの反応性を利用して布に葉の模様を写す技法で、幼児でも年中以上には有効な保育教材として使えるであろう。後者は、いわゆる天然の絵の具づくりで、染液に直接媒染剤反応させ、石灰によって顔料を沈殿させる技法である。沈殿したものを濾過するのに手間がかかるが、絵の具ができてしまえば自由に使える教具になる。ワークショップを通して、やはり自然素材に手間暇かけるプロセスに保育的な発見があったようで、有意義な研修会になった。



図3 マメガキを下ろし金で磨り潰す



図4 タンポンを作り葉に汁をつけて叩く



図5 石灰媒染すると茶色に発色



図6 有機顔料を使った叩き染め

ハ) 第2回研修会「植物観察の技法とフィールドワーク」(2016.10.22)

植物観察の視点から橋田弘一氏を講師に迎えて秋の植物を中心に講話していただいた。氏はエコ・ハウスたかねざわで長年ボランティア活動として子ども達に植物の楽しさを伝えてきてくださっており、今回は植物の魅力だけでなく、自然保育で必ず出会う有害植物についてもリスク管理の観点から話していただいた。後半は、保育園に隣接する畦道と里山を散策しながら植物の名前の由来や性質など、興味深い話を伺いながら、この時期ならでの植物と向き合いました。こどもをどう自然の世界に誘うか、たくさんヒントを得ることができた。後日、保育士が資料集を作成し、実際に子ども達と散策したとの報告を受けている。直ぐに実践に移すことができる研修会を今後も企画することが肝要である。



図7 講演中の橋田先生



図8 フィールドワークの様子

二) 第3回研修会「冬の生き物観察会」(2016.11.5)

生き物は子ども達がワクワクする対象であるが、女性が多い保育の世界では苦手な保育士が多いのも事実である。とはいえ、里山での遊びのが昆虫や両生類、爬虫類を介して発展するものである。今年度最後の研修会として、連携 NPO 法人が管理している「伝統染織の森」をフィールドにした生き物観察会を行なった。実施時期が初冬であることから、生物の姿は見られないが、越冬環境を学ぶことで探し出すことが遊びにつながり、大変楽しい会になった。静かな冬の里山だからこそ、積極的に利用していきたい遊び環境である。



図9 間伐材の山をひっくり返して生き物を観察



図10 捕獲した蛇の赤ちゃんに興味津々

(2) 藍染活動の動機付け分析の試み

保育実践の計画に基づき藍染活動を行い、その様子をビデオカメラを用いて記録した。そこから園児の発話記録、行動分析を行い、発達支援の役割を考

察した。なお、行動は表1に示す動機づけ類型の分類基準に基づいて分類した。視点については、連携保育園の保育者と共同で幼児の行動を当てはめて考察した。

表1 動機付けの分類 (川村 2002)

視点	カテゴリ	定義
始発	自発的	自分から進んで課題に取り組み始めた場合
	他発的	他人(指導者や養育者など)からすすめられ、あるいは促され、あるいは強制されて課題に取り組み始めた場合
	判断不能	観察された行動からは始発の判断がつかない場合
目標	内生的	課題をすること自体が目標となっている場合 「好き」「楽しい」「面白い」などの理由で自己目的に課題に取り組んでいる場合
	外生的	課題をすることに付随して得られる報酬(褒められること、叱られないこと等)が目標となっている場合 「褒められるため」「叱られないため」などの理由で手段的に課題に取り組んでいる場合
	判断不能	観察された行動からは目標の判断がつかない場合
脱動機づけ		課題に対して興味・関心を全く示さない場合

(a) 五感を使った直接体験による内発的動機づけ

藍染活動の取組では、幼児が活動の中で疑問や不思議に感じる場面が多く見られた。「なぜ」という感情が幼児の中に芽生えることは、幼児が自分なりの答えを探そうと意見を述べたり、近くで観察しようとする行動につながる。土を触った感触や藍の独特のにおい、藍の色の美しさに幼児は幾度も心を奪われ、感動する様子は、まさに五感を意識した経験が行動の原動力となる。そして、この直接体験による経験が心に印象深く残り、その後の成長における内発的動機づけの成長に効果を与えるだろう。

(b) 失敗から学ぶ内発的動機づけ

幼児の発達には連続しているが、一進一退を繰り返す。一度失敗をしても、その後、その失敗を繰り返さないように考えたり、工夫をしたりすることができれば、幼児にとって大きな利益となるのである。藍を育てる過程では、植えた種がニワトリによって食べられてしまったり、様々な苦労や失敗を重ねてきた。しかし、幼児は途中で投げ出すことなく課題を乗り越えようと努めてきた。これは、未知な自然の反応に対して試行錯誤し、あらゆる手段を考え、生み出すことによってのみ対応できるのである。自然との関わりを含んだ藍染活動は、この試行錯誤を生み出す内発的動機づけを高める効果が期待できると考えられる。